PDF で提出してください

書 式 6

助成番号	２２－Ｇ２２

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

（MS Word）

【氏名】
中野 顕正

【所属】（助成決定時）
弘前大学 人文社会科学部

【研究題目】
中国・朝鮮半島から渡来した霊像の日本における信仰的定着と霊験譚の創出

【研究の目的】（４００字程度）

大陸から日本へ渡来した仏像・仏画は、多くの人々の信仰を集めて日本文化史上の重要な位置を占め、古典文学や古典芸能の題材ともなったことで、日本人の「国民性」形成の一翼を担うに至った。このことは、ややもすれば偏狭な国粋主義的イデオロギーに陥りかねない日本古典研究の領域が、実は国際性と国民性（自国性）との共存を成し遂げ得る可能性を有している点において、重要な事象であると言えよう。すなわち、大陸から渡来した霊像が日本社会に定着してゆく過程を解明することは、日本古典を偏狭なイデオロギーに陥らせない上で重要な意義を有するものと考えられる。かかる問題意識のもと、大陸から渡来した霊像、および渡来したとの伝承をもつ霊像について、その信仰が日本において定着し、民衆文芸・芸能の分野に享受され、日本という共同体の物語として確立するに至った過程を解明することが、本研究の目的であった。

【研究の内容・方法】（８００字程度）

本研究では、多くの人々の信仰を集め、縁起説話が人口に膾炙して古典文学や古典芸能（室町時代物語〔御伽草子〕、能〔謡曲〕、古浄瑠璃、近世浄瑠璃、歌舞伎、近世小説など）の題材となるに至った霊像のうち、実際に大陸から渡来した仏画として當麻曼陀羅（奈良県當麻寺本尊）を、また大陸から渡来したとの伝承が後世に創出された仏像として善光寺如来（長野県善光寺本尊）を、それぞれ検討対象として取り上げた。

當麻曼陀羅については、本助成受給者が以前からおこなってきた縁起説話の発生についての研究の成果を踏まえ、そうして発生した縁起説話が物語化を経て人口に膾炙してゆく過程を検討した。特に、當麻曼陀羅縁起が物語化してゆく最初期の形が鎌倉時代後期頃成立の道光了慧撰『五巻抄』（散佚文献）に由来することを明らかにした上で、その内容復元を試み、中でも縁起の物語化に際して新たに付加された各要素を分析的・注釈的に検討することで、物語化の意図や構想を研究するという方法を採った。

善光寺如来については、先行研究中の基礎文献である坂井衡平著『善光寺史』（脱稿 1934 年。現存刊本は 1969 年東京美術刊で、著者自筆原稿ではなく別人の手になる清書本を底本とする）の現存刊本に多くの不備が含まれていることから、まずは当該文献の本文批判をおこない、研究のための基礎的な環境整備をおこなうこととした。特に、現存刊本中の誤字・錯簡の修正、段落分けの再検討、索引の作成などを行うことで、当該文献の中で展開される考証研究の論理を正しく跡付けられるようにし、当該文献の考証を批判的に再検証するための基盤づくりを進めた。またその中で、当該文献の中で示された研究、特に善光寺如来の大陸渡来説創出をめぐる研究や善光寺如来の縁起発達史についての研究などにつき、その考証過程の再検証をおこなった。

【結論・考察】（４００字程度）

當麻曼陀羅については、『五巻抄』における縁起の物語化（継子譚の付与）を検討し、観世音菩薩の因

位譚（菩薩としての修行を決意するに至る、前世の因縁の物語）を説いた偽経『浄土本縁経』の翻案として構想されていることを指摘した。その成果は中野顕正「中将姫継子譚の初期形態」(『中世文学』68、2023 年）として公表した。そうして成立した継子譚が、変貌を遂げつつ人口に膾炙してゆく過程については、今後継続して研究を行う。

善光寺如来については、坂井衡平著『善光寺史』の著者自筆原稿を全丁撮影し、テキストの入力を進めている。本助成終了時点で、第一編第四章第四節までの入力を終えた。これは、分量としては全体の３分の１程度だが、著者の考証の中核となる、善光寺縁起の発達史、善光寺如来の成立、善光寺如来の大陸渡来説創出といった論点を含む箇所に当たる。この作業によって得られた成果により、今後、善光寺如来をめぐる縁起説話・文芸についての、先行研究に対する批判的再検証が格段に容易となった。今後ともこの成果を踏まえ、継続して研究を行う。